



MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

10

1998.3.31



【大雪に埋もれた移築民家～1月23日撮影】

富士吉田 あれこれ

吉田の気候

富士吉田市は富士山北麓の扇状に広がる傾斜地にあり、市街地は小規模な平坦地を中心に標高700～800mの間の比較的高冷地に位置しています。そのため気候は同じ山梨県内においても、御坂山地を越えた甲府盆地及びその周辺とはかなり異なります。

例えば、県内の気象情報で甲府と河口湖・山中湖の気温を比較すると必ず4～6度位の差があり、山中湖とは10度以上も開きがある時があります。このため、一年を通して様々な「違い」がみられます。

まず、春。甲府では4月の初旬には桜の花見ができますが、吉田では2～3週間後になり、標高の高い場所だとさらに遅く、毎年中之茶屋周辺で開催される富士桜まつりはゴールデンウィークに行われます。もちろん田植えの時期も異なります。

次に、夏。甲府では猛暑となりますが、吉田は比較的冷涼で過ごしやすいです。しかし、「夏が来た、と思ったらもう冬か」というほど短く、裸で寝られる日も数えるほどです。

そして、秋。吉田の朝晩の冷え込みはきつ

く、秋はあつてないようなものです。

最後に、冬。今年一月中旬の記録的な大雪は記憶に新しいところで、各地で多くの被害がでたり雪かきや交通機関のマヒの中の通勤など苦労した人も多かったようです。甲府では49cmという観測でしたが、吉田では30～40cmの積雪は当たり前です。しかし、80cmを越す大量の雪にはさすがの市民も降参でした。1m以上の積雪があった場所もありました。

もちろん市域でも「違い」は見られ、標高の低い上暮地地区と厳寒の山中湖村境に位置する博物館とでは積雪量も異なり、博物館では夏の3ヶ月を除いてストーブは必需品です。

人々の営みはその地域の自然環境等の影響を受けて成り立っています。甲府盆地周辺と富士五湖地方とは同じ県内でも習俗や習慣の違いが多々ありますが、これには気候の違いに起因している場合が多くあるのです。

我慢するのは暑さか寒さか。優先するのは温かさか涼しさか。意見の分かれるところですが、寒すぎてゴキブリも棲めない地域でも「住めば都」なのです。

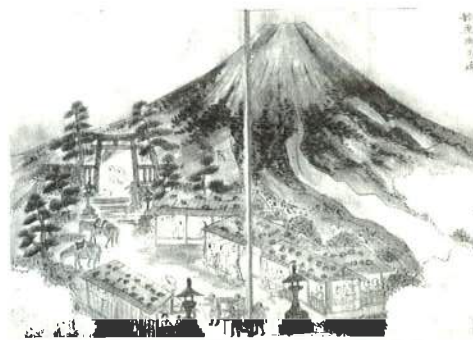
▼博物館レポート

富士山馬返し～登山道発掘調査近況報告②を交えて

はじめに

富士吉田市で平成8年度から5ヶ年計画で行っている富士山吉田口登山道整備活用推進事業のための発掘調査は、平成8年度の一合目鈴原神社周辺に引き続き本年度は馬返しから富士山禊所までのルートを行いました。その結果、現在の登山道以前の直登する道の痕跡が確認されました。

今回のレポートでは馬返しの概要とその周辺にあった山小屋の様子などを紹介しながら登山道発掘調査の成果を報告します。馬返しの変わり行く歴史を明らかにする中で、吉田口登山道の今後の在り方を考える一助になれば幸いです。



【富士山明細図に描かれた馬返し】

山小屋と登山道

かつての富士登山は富士参詣・富士登拝といい、信仰を目的として登るのが本来の姿でした。麓からの登山は通常一泊二日を要したため、山内の登山道沿いには茶屋や室(むろ)と呼ばれる山小屋が多く営まれていましたが、単なる休憩や宿泊施設ではなく、神仏を祀る拝所としての性格も併せ持っていました。

ところが、昭和39年に富士スバルラインが開通し自動車まで五合目まで行くことができるようになると、手軽に登れる山として一般登山者が急増し、信仰の山も俗化の道を進むことになりました。これにより五合目以上の山

小屋ではかつての信仰施設としての役割はほぼ終えたものの、多くの登山者で現在も賑わっていますが、五合目以下の吉田口登山道沿いの山小屋は俗化どころか衰退の一途をたどりはじめ、現在では建物も倒壊するなどして往時の面影はまったくありません。

しかし、近年に至り、五合目以下の荒廃した吉田口登山道を見直そうという気運が高まり、登山道を利用した各種イベントや今回の整備事業など様々な活動が行われると同時に、一部の茶屋では営業が再開されるなど復興の兆しが見えてきています。

富士山馬返し

吉田口登山道の区分は草山・木山・焼山の三つに大別されており、焼山は草も木もない五合目以上をいいます。馬返しは草山の最終の地で、その名が示す通りここから先の木山は馬を降りて自らの足で登山することになっていました。

馬返しという呼称は江戸時代からあり鈴原馬返しなどと呼んでいましたが、かつてこの地で浅間の祭礼に流鏝馬(やぶさめ)が行われたところと伝えられることから、この辺りから一合目にかけては騮ヶ馬場(りゅうがば)ともいわれていました。戦国時代にはこの先からは鳴物を御法度とするなど聖域とされ、馬返し付近はその境界にあたる場所であったと考えられています。

「富士山明細図」などの絵図や史料によると、江戸時代後期の馬返しには四軒の山小屋



【馬返しから鳥居を望む】

※中央の白く見える小屋は巡查派出所です。派出所が馬返し・五合目・八合目に設置されたのは明治40年なので、写真はそれ以降のものと思われます。鳥居の手前に石段があり、馬返しの広場から直登する道が確認できます。

▼博物館レポート～富士山馬返し

馬返しの
隆盛と衰退

が広場を囲んで存在していたことが確認できます。また、入口には一対の石灯籠が立ち、馬が休憩する広場の上には石の鳥居が設けられていました。四軒の山小屋が明治以降も存続していたかは不明ですが、明治の終わりから昭和の中頃までの間には、鍋屋・桂屋・大文司(字)屋・富士山ホテルの四軒の山小屋が営業しており、鳥居の上には富士山禊所(みそぎじょ)がありました。

馬返しの広場から鳥居までの登山道はほぼ

近代の富士登山は信仰登山から観光登山への過渡期で、大勢の一般登山者で賑わいはじめた時代でもあります。このため富士山山小屋では組合を組織して宣伝活動や安全対策、そして宿泊料や販売価格などの取り決めも行って誘客を競いました。

こうして吉田口登山道は隆盛のときをむかえましたが、その賑わいの最大の要因は交通網の整備・発展にありました。明治36年の中央線の開通と同時期の大月・吉田間の馬車鉄道の登場は従来の徒歩及び馬での旅を変えるもので、加えて乗合自動車(バス)の出現に

馬返しの
山小屋

博物館には馬返し周辺にあった鍋屋と桂屋の山小屋関係資料と、「オハライサン」と呼ばれた富士山禊所の資料が収蔵されており、山小屋の営業形態や規模などが多少明らかになっています。

鍋屋は宿泊の提供をしていなかったため山小屋というよりも茶屋とっていました。創業は明治20年頃といわれていますが、江戸の末期にはすでに存在していたことが「富士山道知留辺」などの史料からうかがえます。富士スバルラインが開通する前の昭和38年頃まで営業を行っており、登山期以外の時期は麓の家で豆腐屋を営んでいました。現在の馬返しの広場から車止めを通過して登山道を20mほど進んだ場所に道をはさんで左右に石灯籠がありますが、この左側の灯籠の横に茶屋があったといわれています。現在は何も残されておらず正確な位置は不明ですが、この場所が平坦地になっていることや、大正期頃の写真に灯籠とともに建物が確認できることから、ほ

最短距離で直登するように設けられていましたが、明治の終わりごろから改修が加えられ、次第に現在の登山道が使われるようになりました(詳細は後述の発掘報告参照)。現在は大文司屋のあった場所に明治大学の山荘がある他は、倒壊した建物の残がいが見られ、また、石灯籠と鳥居の一部が残されていますが、登山道の改修や地形の変化などによって江戸期や明治期といった各時代の様子を正確に確認することはできません。

よって昭和のはじめに北口浅間神社から馬返しまでバスが運行するようになってからは登山者の数もさらに増え、馬返しも吉田口登山道の出発地として賑わいをみせました。

しかし、このバスの登場が逆にこの登山道を衰退させる原因ともなったのです。昭和27年には船津林道を利用したバスが五合目までの輸送を可能にしたため吉田口登山道は利用者が減りはじめ、決定的となったのが昭和39年の富士スバルラインの開通でした。これによって馬返しでの山小屋の営業は厳しくなり次第に荒廃の一途をたどっていきました。



【馬返しの山小屋】

※大正のはじめ頃のものと思われます。笠に行衣姿の登山者と荷物を背負った強力(最後尾)の列が確認でき、当時の賑やかな様子がうかがえます。右側が大文司屋、左側が鍋屋で、正面は富士山ホテルです。富士山ホテルは当初は平屋だったものを二階建てにしました。登山道をはさむようにして立つ一対の石灯籠や、雨などで道が崩れないための「ミズキリ」の丸太が確認できます。

▼博物館レポート～富士山馬返し

ぼ確実といえます。

鍋屋では飲物や食事などを販売していましたが、中でもお赤飯は鍋屋だけで扱っていたようで、弁当としてニギリメシにしたものが好評だったそうです。また、うどんは汁を沢山作っておき、冷たいままの汁の冷たいうどんは夏季の食べ物として美味しかったといえます。その他、ラムネやサイダーなどの飲み物も販売していましたが、戦後アメリカ兵が登山するようになってからはビールも仕入れました。

茶屋には八畳の座敷が三部屋あって、板敷の上にヒキゴザを敷いていたそうです。ここにチャブダイ（チャボダイといった）を並べ飲み食いしたわけですが、登山者はワラジ（草鞋）のまま土足で上がり休憩しました。富士信仰登山者である道者（どうじゃ）は麓の御師宅を朝8時ころ出発し10時頃鍋屋に到着しますが、お茶を飲む前に熱燗で酒盛りをしたといえます。上吉田の御師「筒屋」や「しほや」の講社が利用しました。



【鍋屋の資料】(企画展「新収蔵資料展」から)

桂屋は明治の終わりから大正時代にかけて経営を始めたものと思われ、昭和29年まで営業を行っていました。上吉田の御師「大番城」の檀家である富士講の山菊が休憩する山小屋でもありました。小屋のあった場所は同じ時期にすでに存在していた大文司屋（現明治大学の山荘）の麓側で、現在の馬返しの広場に残るコンクリートの基礎辺りといわれています。

桂屋は休憩の際に湯茶だけでなく食事なども提供する山小屋で、ご飯やオツユ（御汁）、その他生揚げを煮たものなどが用意されていました。山小屋で必要とする荷物は主に馬で

運んでおり、山小屋組合に加入していたため、荷物を運ぶための馬方が朝早く麓の自宅に来たそうです。運搬賃は重さで決まっており、食料やサイダーなどの飲み物をはじめ、金剛杖や笠など山小屋で販売する登山用具を運びました。また、馬で運ぶのは朝だけなので、足りないものは人間がショイコ（背負子）で運びました。登山期が終わると来年度用の薪の用意や、小屋の修復などを行いました。



【桂屋の資料】(企画展「新収蔵資料展」から)

富士山禊所は大正年間に建てられたものといわれており、以前は鳥居をくぐった右側でお祓いを行っていたようです。本殿と拜殿をもつ神社形式で昭和40年頃まで登山者のお祓いを行っていました。博物館に収蔵されている資料には皿や椀などの調度品も多くあり、当時の禊所が休み茶屋も盛んに経営していたことがうかがえます。倒壊していた建物は本年度の調査時に解体・撤去されました。



【富士山禊所】

企画展は平成9年10月18日(土)から12月14日(日)まで開催したもので、平成6年～8年までの間に収集した資料を紹介しました。

(高村)

登山道発掘調査 近況報告②

●調査の概要

馬返し地点の発掘調査は平成9年10月13日から12月15日までの約2ヶ月間にわたり実施しました。調査は古写真等の資料を参考にして富士山に向かって直線的に登り上げる旧登山道と推察される掘状の凹地と鳥居が残されているその周辺部そして旧登山道を塞ぐかたちで建てられていた富士山禊所跡の3ヶ所の発掘を行いました。

前回のレポート（博物館だより⑧）でも述べたように富士山の登山道はとも崩れやすい地質に加えて雨や雪解け水によって流される非常に壊れやすい道といえます。そのため登山道を維持するための補修工事は各時代にわたって幾度となく行われてきた経緯があります。今回の調査地点である馬返しも時代の流れと共に変わっていったことがわかりました。

●旧登山道の調査

「富士山明細図」や古写真に見られるように鳥居に向かって直線的に登り上げる道の存在は以前から指摘されていましたが、調査前は藪が生い茂り、旧来の道があったことをうかがうことはできませんでした。しかしながら、藪の伐採後、周囲の清掃を行っていく中で倒壊した石造物や平坦地が確認され、旧登山道の状況が概ね明らかになりました。

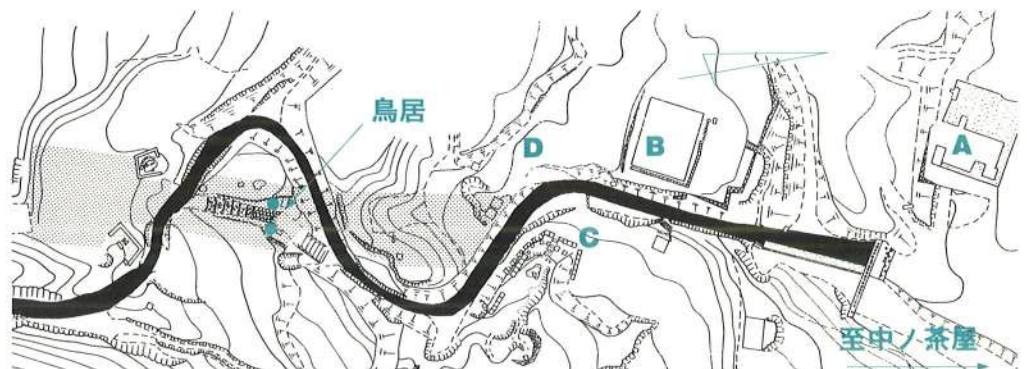
明治末期頃に撮影されたと思われる写真（2ページ下段）には鳥居に向かって直線的に登り上げる道と石の階段が、そして前面には馬車が止まれるほどの広場が広がるなど、旧道の様子をうかがうことができます。これら写真に写し出された範囲の具体的な状況を把握

するために南北に縦断する土層観察用のベルトを残して掘削を進めたところ、広場と考えられる平坦地と鳥居に向かう緩やかに傾斜する道が写真とほぼ同じ状況で確認されました。そして現在の登山道と交差する付近、検出された道の西壁において高さ約1m、長さ約3mの石垣がやや東側に湾曲するかたちで検出されました。石垣は「落し積み」と呼ばれる石の積み方で近代に入ってからのもと考えられます。一方の南東側では同様の石垣は検出されませんでした。地山をそのまま切り落とす状態で造成されていることがわかりました。これは本来、道幅を両側に石垣が構築されていたものを道を拡幅するために造成をかけた結果、東側の石垣が消失し、今回発掘された状況が検出されたことが考えられます。また、検出された石垣は鳥居部分にある石垣と同様のものと思われ、現在の登山道に分断されなければ連続していた可能性があります。

調査範囲内の土の堆積は全体的に薄く、広場のあった平坦地では20cmほどでしたが、石垣の検出箇所付近では約1.5mの堆積がみられました。これは現在の登山道を造成した際に



【旧登山道の調査状況】



【調査範囲図】

凡例

— 現在の登山道

--- 調査範囲

山小屋のあった場所（推定）

A 桂屋

B 大文司屋（現明治大学山荘）

C 鍋屋

D 富士山ホテル

▼博物館レポート～富士山馬返し

押し出された土砂が流れ込んだためと考えられます。また、この造成により水切りのための土手が形成され2m以上の深さに及ぶところもあり掘り下げに苦労しましたが、この土手により、結果的には旧道が雨や雪解け水などによる流失から保護されるかたちとなりました。

先の写真に見られる鳥居前面にある右の階段は石垣が検出されたあたりから構築されていたものと考えられます。この階段の痕跡を確認するため範囲を拡張しながら掘り下げを行いました。この拡張部から鳥居下の石畳にかけての傾斜に20～40cm大の石が集中して出土し、石の間や上には固く締まった褐色の土がつめられていました。石は段状に横方向に並んでおり、ほぼ道幅の長さで出土しています。これらの石が階段の裏込めに使ったもので段をなす石が抜け落ちた状態で検出されたものなのか、あるいは現在の登山道を造成する時に補強のため入れ込んだものなのか現時点では明らかになっていません。石を外した段階で新たに階段が検出される可能性も考えられるので、再度調査を続ける必要があります。

●鳥居周辺部の調査

調査以前より鳥居や石畳、石段が存在する事が確認されており、昔の馬返しの状態を示す非常に貴重なものといえます。これらの範囲を明らかにするため清掃発掘をし、全体の確認に努めました。

石の鳥居は文政9年(1826)のものですが柱を残すのみで笠木や貫が抜け落ちています。道の幅で東西に構築されている石垣は長さ12m、高さ0.3～1mの規模で、鳥居付近で幅



【鳥居周辺部調査状況】

が広がっています。この石垣西側の段上には4基の石造物が設置されていますが、その台石がコンクリートであることから補修されたものとわかります。また、猿の石造物や灯籠の一部が道脇に無造作に置かれています。石垣には石の抜け落ちを防ぐためにコンクリートが部分的に充填されており、鳥居にも鉄筋やコンクリートによる補修の痕が見られます。また、鳥居の杵石は転用材で銘が刻まれているもので、おそらくは玉垣に使われていたものと考えられます。

道路面は石畳と石段で構成されていました。石畳は30×50cm大の玄武岩を使った切石でその石材の使用法からみて近世期のものと考えられます。石畳は長さ約3m×幅2mの規模で遺存していますが北側は石が抜け落ちて崩れた状態になっています。おそらくは鳥居の登り上げる階段部分まで石畳が敷かれていたものと考えられます。石畳の南側へ連続する石段は7段からなっています。段と段の間には約1mほど平場があり、そこに40～60cm大の平石を敷いています。段に使用している石は割石や切石を用いており、統一性に欠け、石畳とは明らかな時間差があると考えられます。また、石畳そのものも組み直し等の改修がなされている可能性も考えられます。今後、これら鳥居、石畳、石段及び石垣の調査を進めていき、それぞれの構築状況を明らかにしていきます。

●富士山禊所の調査

鳥居から先の登山道は富士山禊所のあった場所を左に曲がってから登るのが現在のルートですが、禊所の背後には鳥居から続くと考えられる直線的に延びている堀状の凹地が道



【大正8年の馬返し～後方は禊所】

▼博物館レポート～富士山馬返し

の痕跡として残されています。この道の痕跡は昨年の一合目鈴原社周辺の調査で確認された社に直登するルートと繋がるものと考えられます。

調査以前、禊所は屋根部のみを残して倒壊した状態でした。禊所は大正年間に建てられたものといわれており、大正8年の古写真にはすでにその存在が確認されています。発掘調査のため、その部材を撤去していくなかで、昭和3年の棟札が見つかりました。この棟札は後の増改築によるものと思われる。

調査は旧登山道の痕跡の確認と建物の規模をとらえるために礎石を検出する作業を行いました。礎石の検出面まで北側では20cm程でしたが、山の斜面を背にした南側では土の堆積が非常に厚く、約1.5m程もありました。周囲の地形を観察してみますと、禊所が建てられていた平坦地は旧登山道があったと考え



【礎石の検出状況】

馬返しはその名が示す通り馬を帰す場所であり、そこから先は自らの足で登山しなければならない境界でした。これには馬返しが富士山という信仰世界への本当の意味での入口、そして出発点だという認識が古い時代からあったからだと考えられます。しかし、馬返しを含めた五合目までの登山道は、近代に入ると一気に隆盛と衰退を駆け抜けました。時代によって求めるもの求められるものは変化していきますが、交通網の発達是一般登山者のニーズに応えた形となり、最終的に吉田口登山道はその役割を終えようとしていました。

られる山の斜面を大規模に削平して建てられていたことがわかりました。禊所部分の旧登山道の痕跡はこの時の造成により消失したものです。また、南側での堆積土は建物が倒壊した後、崩れやすい土質のため崖状になっていた部分が崩れて土が流れ込んだものです。検出した礎石を観察してみますと幾つか転用したものがみられます。石畳に使用されていたものや灯籠の一部、記念碑等の石造物を一部利用していました。

●馬返しの旧登山道

調査の結果、現在の登山道は旧登山道を分断するかたちで九十九折りに付けられていることがわかりました。登山道の改修工事は明治時代以降、度々行われた記録が残されていますが、これらの記録のうち明治40年に福地村（現在の上吉田、松山、新屋地区）にて馬返しから五合目まで馬で登れる道に改修しようとする動きが文書（福地村々会議決書）として残されています。また、大正2年に福地村から出された登山道の県道編入と修復の請願書（福地村役場文書）には明治41、44年に補助金で登山道の改修をしたとの記録も残されています。このようなことから馬返し周辺の登山道は今回の調査結果や文献をもとにすると、この明治末期頃の改修工を経て次第に現在のようなルートに取って代わっていったと考えられます。

（布施）

そして現在、富士スバルラインの自動車規制など環境に配慮した事業が展開される中、吉田口登山道は見直されはじめ、復興というよりも新たな時代の新たな役割を持つ登山道として生れようとしています。しかし、吉田口登山道はその歴史が示すように、信仰のための登山道として存在していました。この事実逆天することは、偉大な富士山の自然に逆らうことです。過去の歴史を踏まえて、新たな登山道を考えることが重要であり、つまりはハードよりもまずソフト面での意識改革が必要だと感じます。

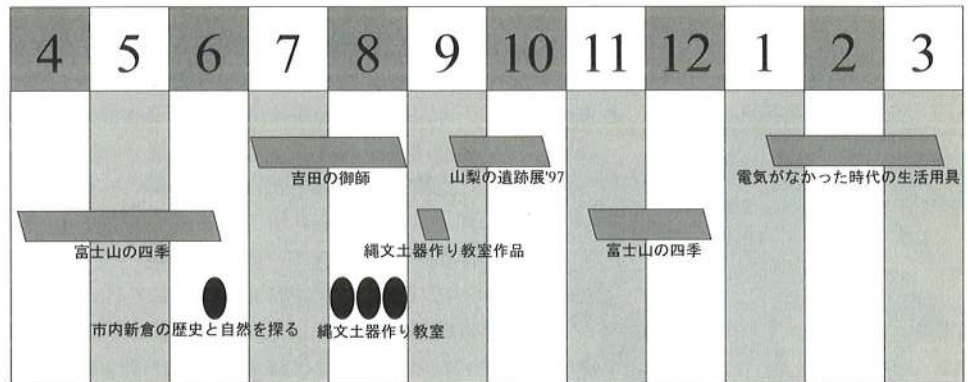
（高村）

おわりに

▼Information

博物館からのお知らせ

平成10年度
の
スケジュール



企画展

●吉田の御師

7月1日(水)～8月27日(木)
常設展示のテーマのひとつである「富士山の信仰」をさらに詳細に紹介します。

●縄文土器作り教室作品展

9月1日(火)～9月13日(日)
体験学習で参加者が作成した土器と縄文土器の製作工程を紹介します。

●山梨の遺跡展'97

9月15日(火)～10月25日(日)
山梨県内で平成9年度に発掘された遺跡を紹介しながら出土品を展示します。

●電気がなかった時代の生活用具

1月19日(火)～3月22日(月)
電気がなかった時代の生活の様子を資料によって紹介します。

写真展

●富士山の四季

4月7日(火)～6月21日(日)
11月8日(日)～12月25日(金)
市内の写真家飯島志津夫氏が撮影した四季折々の写真24点を紹介します。

歴史散歩講座

●市内新倉の歴史と自然を探る

6月7日(日)雨天中止
新倉三ヶ寺と呼ばれる寺院をはじめ、新倉浅間神社など歴史ある町を散策します。(募集等詳細は広報5月号に掲載)

体験学習

●縄文土器作り教室

8月2日・9日・23日(毎日曜日)
実体験を通して当時の技術や生活など縄文文化を学習します。(募集等詳細は広報7月号に掲載)

ご案内

開館時間 午前9:30～午後5:00(入館は午後4:30まで)

休館日 月曜日(祝日を除く)

祝日の翌日(日曜・祝日を除く)

12月28日～翌1月3日

観覧料

大人 300円(240円)
小中高生 150円(120円)
()内は20名以上の団体料金

交通案内 ●中央自動車道河口湖ICより車で10分。

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス15分、サンパークふじ下車。



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る機子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1
TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665
E-mail marubi@mml.or.jp
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005
富士吉田市 ホームページ URL
http://www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp/rekishihakubutu.html

発行 平成10年3月31日

印刷 ㈱シノハラ A&P